東洋大学図書館ニュース

KOΣMOΣ

爽秋を迎えて……1
特集　卒論を書くにあたって……2
海外研究雑感……6
館内だより……8

コスモス　1982　秋　(No.59)

爽秋を迎えて

朝霞分館長　松岡八郎

いよいよさわやかな秋を迎え、快適な季節となり，後期の授業もようやく軌道に乗ろうとしている。学生諸君も勉学にスポーツにあるいはサークル活動に，それぞれ熱心に励んでいることと思うが，いま最も真剣にまた寸暇を惜んで忙しくしているのは，おそらく，来年卒業予定の諸君ではなかろうか。

まず，卒業予定の多くの諸君の前には，現在，就職問題があり，今年は不況のため，例年になく厳しい状況にあるといわれているが，ぜひともよい結果が得られるように努めて欲しいと心から念願している。

さらに，卒業予定の諸君のなかには，卒業論文の作成に日夜懸命な努力をしている人たちもいることであろう。本学では，学部学科によっては卒論が必須科目となっていないところもあり，また卒論そのものを科目として置いていないところもあって，すべての卒業予定の諸君が卒論を書くわけではないが，もしできれば，卒論を書かなくてもよい諸君でも，卒論に準ずるような，なんらかの論文を自発的に書いて欲しいものだと思う。

なぜなら，卒論は学生生活の最後の成果となるべきものであり，したがって最後の締めくくりであり，総決算であり，またその成果は卒業後の社会生活にも必ずや影響を及ぼすものであって，終生の忘れがたい思い出ともなるものだからである。それ故，卒論を書く諸君は，諸先生の指導を受けながら，ぜひ少しでもよいものを，悔いの残らないような論文を仕上げて欲しいものである。

そのためには，まず本学図書館の蔵書をぜひ十二分に活用して欲しいと考えている。図書館関係者はそれを大いに期待している。勿論，本学図書館は全国諸大学のなかの有数な図書館の一つであるといわれてはいるが，自ら限度があり，卒論を書こうとしている諸君の希望をすべてにわたって満たすことはできないことであるから，国会図書館をはじめ，その他の図書館などをも十分に利用すべきであることはいうまでもない。

いずれにせよ，卒論をはじめ，その他，勉学しようとする学生諸君が，最大限に活用すべきは図書館であることは論をまたない。時はまさにさわやかな秋であり，それはまた書物に親しむ秋でもあろう。

特集

卒論を書くにあたって

（掲載は五十音順）

卒業研究の意義と心得え

青柳宣生
（工学部助教授）

社会的な活動の場においては，自分の仕事の内容や結果を他人に知らせるために，報告書や論文という形でまとめたり，口頭で説明することが必ず附いて廻る。卒業研究はそのための訓練であって，これによって，行った仕事を総括する方法と発表する方法を修得し，併せて完成した卒業論文を研究室の人々に参考資料として残しておくことにその意義がある。

仕事を開始するには，まず“なにを”，“なぜ”行うかを考え明確にする。これは研究・開発といった問題だけでなく，進化する社会の人間の活動において問題を解決しようとするとき共通して直面する最も重要な事項である。次に目標とする問題を“どのように”解決するかを考える。この段階まで進めば，結果を除けば仕事の骨組みは，完成したと考えてよいだろう。卒業研究に限っていえば，この２つのプロセス，特に前者の過程のないものは，その内容がいかに優れていようとも演習問題を解いたにすぎない。

研究を進めるに際して，その研究に関係したことを過誤，失敗も含めて細大漏らさず記入しておく“研究ノート”（あるいはカード）といったものを用意しておくとよいだろう。ことを時々整理して読み直すことによって考え方の不備なところに気付き，同じ誤りの回避ができ，データの不足な部分の補強，研究の見透しや方針の変更などに役立つ。この研究ノートをまとめれば論文として結実することになる。

次に論文の表現の問題では，論文は自分の研究を他人によく理解させることを目的として記述するものであるから，簡潔な表現で筋が通っていてねらいが明快であることが肝要である。たとえば，グラフ一つですむことを数値を羅列するとか説明を加えないで数式のみを並べるとかあるいは流れ図で示せばよいことを長々とプログラムまで本文中で書くなどということは内容そのものよりも国語表現上の稚拙さの問題である。

最後に口頭発表でも論文の表現の問題と同様であるが，聴く人は自分の研究について無関心あるいは何も知らないという前提のもとに，自分の研究を全て話そうとするのでなく，重要な点とユニークの点だけを要領よく筋を通して話すべきである。

卒業研究は大学生活を総仕上げとして，教員の研究上の問題というよりも，学生への教育的配慮に重点があるべきである。よって卒業研究はそれを行う学生が主体性を持っているのであって，教育はそれを介添えするにすぎない。

世に目糞・鼻糞の類の論文が氾濫しているが，卒業研究の優劣はその内容の良し悪しも重要であるが，第一義には学生がそれにより深く主体的に取り組んでいったかということで判断されるべきである。卒業研究の存在とその取り扱い方こそが大学が，単なる知識や技術の修得だけではないという点で他の教育機関と峻別しているといっても過言でないだろう。

埋　橋　勇　三
（文学部講師）

卒業論文が必須の学生にとっては，論文を書き上げるまでは落ち着けないものであろう。

「卒論が，卒論が……」という声をよく耳にする。それだけ重要視されているという点では好ましいことに違いないが，口にする余り，ややもすると『卒論』が化物のように諸君の心の中を独り歩きしてしまうことがないだろうか。現実から離れた姿なき存在として無気味な恐怖感を醸し出す。そのために，訳もわからぬ不安に陥り，憂うつな思いと書けないのではないかという懸念だけが浮上して来る。なるほど，未だ経験したことのないものへの不安はあろう。しかし，先輩たちによって語り伝えられたりして，どこからともなく聞えて来る不安までも諸君が背負う必要は全くないのである。初めて論文に向かう者がごく普通に抱く不安を抱けば事足りる。分別のある不安は傲りを押えて真摯な態度を養い，好い結果を生み出すものである。『卒論』を危惧する余り，正しいスタートが切れない学生が少なくない気がするので一言注意を促しておく。

論文の価値は未だ知られざることを説得力のある文章によって知らせしめることにある。従って，新しい発見がない論文は無意味である。これは忘れてはならぬ理想である。しかし，口で言うほど容易なことではない。論文と称する刊行物を二，三読めば，論文らしくするために彼らがいかに骨を折っているかが一目にして瞭然である。私は論文の理想をそのまま卒業論文に当てはめる必要はないと思っている。日頃勉強しているうちに興味をそそられた小さな問題を取り上げて，それを徹底的に深く掘り下げる。そしてその間の集中の足跡が読み取れればそれでよいと考えている。ただし，少なくとも，自分の足で歩き，自分の目で見，自分の頭を通過させたことを書いてほしい。諸君の論文が諸君の良心に忠実であることを望む。そうすれば，たとえ既知の内容が書かれていても，やはりその人の個性が必ずや出るからである。俗に言う能力には差があるからそれは問わないとして，まずは己の良心を欺かぬものを書くように最底限努めるべきである。仮に知的レベルが底く欠点が多くとも，鋏と糊で切り貼りした代物より忠実に心を通わせたものの方が，はるかに読み手を魅了する。論文の第一歩を印す卒業論文は自己に誠実に没頭したときに生ずる緻密にして自由奔放な心の知的情的躍動が表現されていれば，充分ではないかと思う。

A Shropshire Lad Ital

遠　藤　祥　雄
（短期大学教授）

pessimistic で常に挫折感・敗北感に苛まれていた大学3年の秋，ふと手にしたのが A. E. Housman の A Shropshire Lad (1896) であった。

Now, of my threescore years and ten,
Twenty will not come again,
And take from seventy springs a score,
It only leaves me fifty more.
And since to look at things jn bloom
Fifty springs are little room,
Abont the woodlands I will go
To see the cherry hung with snow.

美しいもの（"things in bloom"）の命のはかなさと，過ぎ去りつつある己の青春と，二つのものへの哀情を Housman は憂を含んで静かに呟やくように語る。"Carpe Diem＝seize the day" という西洋の詩の古来のテーマを，20歳の若者 Terence Hearsay の口をかりてすがすがしく歌った詩人の stoic な諦念は，まさに処置なしの気粉れ一方の潰え行く青春を送っていた僕にも，深い感懐をもたらした。その感懐は，Housman の誇り高いしかし苦渋に満ちた，個人経験から湧いて生まれた老成した諦念や決意とは程遠いものではあったが，読み進んで行くにつれて，その緊迫した情感と鋭い感性の内部に，人生の惨めさを直視してあくまでもそれに耐えて生きて行こうとした精神の強靭さ，不屈な剛毅さが秘められていることに気付き感歎したものであった。そしてなによりも僕の胸を打ったものは，彼の詩の深い哀愁

の響きを通して，切々と迫って来る詩人の心情のたぐいまれな優しさ，その優しさは，成熟した魂の優しさであり，古武士のように耐える心の凛とした優しさであった。

今にして想えば，研究とは程遠く，ただただ感受性だけを頼りに，己の生ざまをHousmanの詩に通わせて書きなぐった卒論ではあったが，またこれ程の感動や共感をもって，一人の詩人の詩を愛誦したこともなかった。惚れるということが，作家研究の第一歩であるとするならば，まさにあの時，僕はHousmanにぞっこん惚れていたということができる。様々な作品との邂逅の中で，己の存在を激しく揺さぶる——そんな作品やテーマを選ぶことが先決なのだ。汗ばんだ魂の息遣いを感じさせる卒論を書いてほしい。

卒業論文私見

大島建彦
（文学部教授）

大学の卒業論文といっても，学術論文の一種にほかなりません。大学の学生諸君は，卒業論文の作成を通じて，専門の学問研究とかかわることができます。優秀な卒業論文であれば，専門の学術誌にも掲げられるのです。

どのような学問分野でも，それぞれの研究対象を離れて，それぞれの研究方法を考えることはできません。あくまでも，それぞれの研究対象に即して，それぞれの研究方法をたてなければなりません。ある一つの学問分野に，ただ一つの研究方法しかなりたたないはずはありません。そういう意味で，それぞれの研究対象について，先学の研究成果をかえりみることは，自分の研究方法をたてるためにも，おおいに役だつことでしょう。

何よりも大事なことは，それぞれの研究対象そのものをほりさげることです。そのためには，できるだけ念を入れて，それに関する資料調査を進めていただきたいものです。れのような入念な調査を通じて，おのずから論文の骨子もととのってくるでしょう。

ある段階までくると，いくらか準備の不足はあっても，とにかく論文の執筆にかかる方が，いっそう賢明ではないかと思います。資料の不備や方法上の問題点も，いちおう論文の執筆にかからないと，なかなかあきらかにみえてこないものです。ある程度の試行錯誤をへることによって，しだいに論文の整備にむかってゆくことでしょう。

いうまでもないことですが，いよいよ論文の執筆にかかったら，かならず表現や表記のきまりを守ってください。細部の表現がととのっていなければ，全体の構成がととのうはずはありません。

ここでは，一研究者の立場にたって，自省の気持をこめながら，ひごろの考えを書きつけてみました。本学の学生諸君が，できるだけ早い時期から，卒業論文の準備にかかり，その締切の期日までには，優秀な学術論文を書かれますように念じております。

玉口時雄
（文学部教授）

私が卒業論文を書いたのは戦後も間もない混沌とした世相のときで，食料をはじめすべてが欠乏しており原稿用紙も同じ規格のものが手に入らない時代でした。論文のテーマは“記紀に対する考古学的研究,,で，記紀・風土記・万葉集などの文献的史料への考古学的資料の対比と考察です。当時研究者の間でもあまり手がつけられてなかったこのテーマを選んだのは学部2年間の在学中（学徒出征による中断）に教えを受けた早稲田大学教授西村真次先生の学風・御指導によること大であり，これが機縁となって以後今日まで歴史考古学関係の諸問題を研究テーマとしています。

私の所属する史学科では，毎年5月中旬に第1回目の指導日を設け論文執筆への総論的指導をおこなってます。当日配布する要綱を参考として論文執筆についての要旨を記しますと，

まず，論文構成については，問題の提起・研究史の整理・本論・結論および展望の4点で，これらの点に留意して構成しなければならない。また，自分のテーマに類似・関係する論文をよく読

みテーマに即した論文作成への具体的方法を会得してください。岩波新書「論文の書き方」（清水幾太郎）は参考になる書と思われます。

つぎに，一般的注意事項としては，論旨は首尾一貫していなくてはならない。何を論証しようとするのか，どのような視点でテーマをあつかうかが重要で単なる物語的叙述に終らないように。他方，先学の研究成果を十分に検討し，資料・参考文献の蒐集に努力すること，また，引用した資料・参考文献についてはその内容を十分に理解しておかねばならない。誤字・脱字に注意するように。

その他技術的注意事項としては，補註のつけ方，資料・参考文献の引用，取り扱い方等について十分注意してください。

いずれにしても本文400字詰原稿用紙50枚以上（史学科の場合）の長文を書くためには強靭な精神力と肉体的調整が要求されます。20,000字以上におよぶ長文を書き上げ得たことは，卒業後例え論文執筆の機会を得ないとしても文章記述への自信を持ち得るものと思われます。今日，私が研究者の一人として自己の研究テーマに即した論文を記述し得ることは30数年前に書いた卒業論文が原点になっているものと思われます。

卒論は日常の学習の中から

松本恒之
（文学部教授）

「最近の学生は……」というような言い方はあまり好きではないが，大学の大衆化につれて，大学で学問をしようと考えない学生が著しく目につくのも疑いのない事実である。私の観察によると，大学生の学問への態度には，4つのパターンがあるように思われる。その1つは，講義やゼミの中から知識を得たいとする受身の姿勢の学生群である。この態度は，学問の入口では不可欠でもある。しかし，それがいつまでも続きそれで終ってしまう点に問題がある。第2は，講義やゼミの内容に好奇心を示し，それに関連した事項について実によく勉強しており，教師に生きがいを持たせる一群の学生である。しかし，それは少数派でもある。第3は，意欲は十分あるが，それに見合う努力が不十分な学生群である。彼らは，問題点を指摘するに鋭敏であるが，それを煮つめるのに怠惰である。教師の期待になかなかこたえてくれない。第4は，意欲に欠け低空飛行をして遂にとび立つことをしない学生群である。

このような学問に対する態度は，卒論の取りくみに直截に反映することになる。優秀な卒論を書く学生は，やはり第2のパターンの学生から出る。第3のパターンの学生は，ユニークといえばユニークであるが，しばしば独善的である。第1のパターンの学生は，勉強の跡は見られるかこじんまりしていて読み手に感動を与えない。時には，複数の書物のレジメと化す。第4のパターンの学生の卒論は，切りばりである。専門書は読んだことがないか読みこなせない。通俗書の切りばりに堕すると，卒論判定の会議の席を賑わすことになる。

つまり，良い卒論を仕上げるのに最も大切なことは，学問をする自主的態度を遅くとも3年生の半ばまでに身につけておくことである。大学の中で，ゼミナールと卒論を書く場こそが最も創造性に富んだ大学らしい場だと私は思う。あらゆる講義がそのような場に収斂されるのが理想である。その意味で，卒論はゼミや講義の中から見出された興味のもてるテーマについての日常的な学習の総決算としてまとめられるべきである。卒論のためのテーマ探し，日常の学習に欠けるアプローチでは書き手にとっても読み手にとっても不幸である。

海外研究雑感

ブラジル・メキシコを旅して

荻　原　国　宏
（工学部教授）

昨年の夏に環境情報科学センターの環境問題の視察の一員として，ブラジル，メキシコの状況をみて歩いて来ました。その時の印象を当時を思い出しながらまとめてみることにした。

視察のコースはリオデジャネイロの水環境，サンパウロの大気，水環境の状況，ブラジリアの人工都市における環境，セラードの開発の状態等を見た後，アマゾン河の中流における都市マナウスに寄り，アマゾンの状態を視察した後，メキシコにおける小麦研究所における新品種の開発が，世界の食糧危機を救ったと言う事を学んだ後に帰国したわけである。

このような視察団には種々の専門家が含まれており，地質，土壌，水環境，大気汚染，土木，等のメンバーが含まれており，視察の間における，フリートーキングの間に種々な新知識を得ることが出来たのも有意義であった。

以下に２，３の私が興味を持った問題をまとめてみたい。

(1) 水　環　境

都市部分における下水の完備の遅れは日本同様であるが，都市部の河川，リオデジャネイロ湾の汚染はかなり進んでいるし，サンパウロ市街地より流出する河川の汚染もかなり進行している。しかし，その土地の広大さによって問題化して来ていないだけである。これらの汚染の主体は家庭排水とサトウキビから砂糖を精製する工場の排水によるものである。しかし貧富の差が大きいため，スラム街の下水は全く手つかずであり，低湿地へ無処理排水，山上近くのスラム街の未処理下水の河川，湖沼への流入はかなりひどい状態である

リオデジャネイロ西部のニュータウン

が，有機物排水であるので自然界へ還えされると言う考えもある点，大国であるゆえんかもしれないと思った。

今回の旅行で始めて学んだもう一つの水問題は乾燥地に農業地帯を作るべく，ダム貯水池等の人工湖を作ると，湖面よりの蒸発が相当に多く，湖底または湖岸の土壌よりの溶解物が，徐々に濃縮されて来て，初期の状態では農業用水に充分に利用できたものが，濃縮された塩類故に農業用水として利用できなくなってしまうと言うことであり，日本の様に降雨が多く，蒸発によって濃縮作用があったとしても，次の降雨で薄められてしまう地域の人間には全く想像できない湖沼の問題がある事を知った。

その後，帰国後，テレビで，アメリカの農地の塩化現象を扱かったものを見る機会があったが，これも農業用水を畑地にスプリンクラー等で散水すると，土中に入った水が蒸発する際に，土中で溶解した塩類を地表に運び，蓄積させて徐々に土地をやせさせている。この現象と全く同じであっ

て乾燥地の農業開発にこんな問題があるのかと言うのが勉強できた。

日本における人工湖の環境問題は冷水放流の問題と，濁水の放流の問題であり，前者は稲作，後者はアユの育成の点で問題になっている。これらと比較し趣きを異にしているその土地特有の環境問題があることが判った。

南米最大の河川，アマゾン河は，そのほんの一部，地図上では点になる様な地点しか見る事ができなかったが，意外に勾配のゆるやかな河川であり，網状をなしている河川である事を知った。今だに本当の詳しい地図は出来上がっていないとの事で，自然環境そのものである。ただし，洪水時と平時における水位差が10m近くあるとの事で，河川の規模を考えると，その洪水の大きさについては日本人では想像つかないものがある。

ブラジルの環境庁長官とのディスカッションで，このアマゾン地区の環境問題と言うのは，現状の保全と言う事に重点がおかれていることが判った。

(2) 大気汚染

都市部における大気汚染は工場，自動車等によるものは日本と同じであり，モニタリングシステム等を導入し，行政指導を含めて着々と手を打っている様子である。

ただ日本と異なるのは自動車のガソリンに30%程度のアルコールを混合して利用している点である。最近では100%アルコール使用の車もあるとの事で，水素と炭素の化合物でのアルコールは燃焼して水と炭酸ガスになるので，大気汚染は全く問題化しないと考えられる。しかし，日本の様に硫黄酸化物，窒素酸化物による大気汚染は少ないとしても，不完全燃焼と言うのはあり得るわけであり，一酸化炭素，アセトアルデヒドの様な物質が排出されて，この処理を進めているところであった。

事実，道路でアルコールの臭いや，2日酔の臭いのすることもたまには感じた。

(3) その他

ブラジルには日本からの移民が沢山渡っているわけですが，その2世，3世の優秀さは他の民族を圧しているとの事で，サンパウロ大学への入学者には，非常に多くの2世，3世が含まれているし，医者等の知的職業についている人が非常に多くなっているとの事である。

ドイツからの移民も同様であって，その持って生まれた国民性が表われてくる様である。

サンパウロに供給する野菜類の大部分は日本人の経営する農場からのものである。またその流通機構も日本人関係者に依存していることも，合わせて考えると日本人の勤勉さは尊い財産かもしれない。

この民族の勤勉さは，民族固有のものであるのか，貧しかった時代に育ったためのものであるか良く判らないが，前者だとすれば，日本の将来には不安がないと考えられるが，後者だとすれば，昭和40年以降，豊かな日本になって育って来ている子供達の成長したときの日本の社会に不安な点が感じられる。

私は多分，前者の日本民族が持っている固有の性質であると想像している。こんな事も旅をして思い当った事実である。

(1982年8月5日　東洋大学稲取セミナーハウスにて)

アマゾン河中流の都市マナウスの河辺に建つスラム街

訂　正

前号の記事を次のとおり訂正いたします。

P.3　上13行目　田中寿夫→田中春夫
P.8　左上18行目　昭和55，56→57，58
〃　右上17〃　数学課へ→教学課へ

ストラスブールの人々

浅野　清
（経済学部助教授）

私が昨年滞在したストラスブール大学はフランスの北東のはずれにあります。2キロメートルほど先のライン川にかかった橋を渡ると，むこう側はもう南ドイツ。街の中心部にあるカテドラルの展望台からは，すぐそこにドイツの「黒い森」まで見渡せます。

国境というと，なにか冷たい，とげとげした雰囲気を予想しがちですが，ストラスブールの街にいてさえ，聞えてくる言葉はドイツ語とフランス語が半々。新聞屋のおやじさんなど，挨拶はフランス語で，お金の計算になるとドイツ語でつぶやいているという具合に，ストラスブールそのものがドイツ的な色合いの濃い土地でもあります。（プロテスタントの教会も数多くあります。）

この土地は旧くはスイスの豪族の領地だったのですが，中世から17世紀末，ルイ14世の軍隊に征服されるまで自治都市として栄え，ストラスブールの街を幾重にも取り囲む運河に盛時の面影をしのぶことができます。1871年にビスマルクの軍隊に征服されてから今日に至るまで幾度か独仏の支配権がこのアルザスの地に交互に及んできたこと，A．ドーデの『最後の授業』によって周知のところです。

アルザス生まれの教授がいみじくも言いました。「アルザスの人々は一度も戦争に負けたことがない」と。半ば自嘲気味とも受け取れる言葉の裏にある真実に，はっとさせられたことを今想い出します。自分たちの「国 pays」，その伝統，その文化に対する畏敬の念が，彼の胸中には脈うっていました。「或る人為的な一状態」としての「家国 l'Etat」の原義が，彼の言葉のなかに美事に表現されていると感心しました。

現在，EC加盟国のあいだでは，加盟国民はパスポートなしに国境を越えることができます。ヴァカンスに，自分の船を操って諸国の川と運河を巡る家族づれ。土曜毎に車で隣国の市場へ買い出しに行く人々。他国の山地にある別荘で週末をすごす人々。官製コマーシャルの“黒い影”とともにしか国境を臨むことのない我々の「国」意識とは，はるかに異なった国家観が，そこでは日常的に形成されているように思われました。

～～～